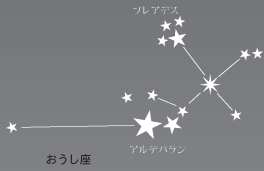


ポラリスを仰ぐ北の大地から



わが癒しのマリちゃん

余市医師会 会長 永井 文作

今から15年前に息子たちにせがまれて生後2ヵ月の雌のミニチュアダックスフンドを飼うことになり、マリと名付けました。しっぽの少し曲がったマリですが、なんとなく愛くるしさがありました。

ダックスの性格が徐々に現れ、物音(電話、チャイム)や来客によく吠え、散歩も好きでした。

息子たちが家を出て夫婦二人きりになってからマリは家族の重要な一員となりました。犬本来の習性ですが、診療が終わる頃必ず居間のある二階の階段で、曲がったしっぽをちぎればかりに振って出迎えたり、夫婦喧嘩の仲裁に入り私に吠えたり(かみさんが私よりランクが上)、好きな日本酒の晩酌にお付き合いしたりで寝食一緒の生活形態でした。

10歳頃に体重が7kgとミニチュアダックスの標準体重を遥かに超える肥満体になり、不妊手術も関係あるが食事内容に問題ありとのことで獣医さんに食事指導を受けました。12歳頃より歯周病を発病し、昨年4月中旬頃(14歳)から食欲不振、多飲、多尿、下痢が続くため、小樽の動物病院を受診したところ、糖尿病と急性腎不全と診断され、助からないかもと告げられていたく自責の念にかられました。

幸い獣医さんの手厚い治療で無事退院することができ、食事療法とインスリン療法を自宅でしていますが、なかなかコントロールも思い通りにはいきません。

現在15歳で人間に換算すると80歳になります。白内障も進み耳も遠くなりあまり吠えませんが、私たちにとってマリの存在が癒しになっております。

ペットブームと言われて久しくなりますが、平成23年度のイヌの飼育実態調査では11,936,000頭で日本人の約18%がイヌと暮らしています。ペット(イヌ、ネコ)も高齢化が加速しておりますが、人間社会と同じですが飼い主とペットとの深い信頼関係が癒しの醸成になるのではと思っております。



地域医療に思うこと、そして余談

胆振西部医師会 会長 坪 俊輔

ここ胆振西部は室蘭に隣接し、伊達赤十字病院が中心となって地域医療を支えています。しかし医師の確保がままならいのは他と同様で、診療科の縮小傾向が続いています。もちろん解決策は検討されていますが、なかなか妙案が見つかりません(これも他の地方と同様でしょうか?)。問題は地域住民の健康を守るために“今どうするか”です。簡単には医師の確保が見込めない以上、総合病院も診療所もそれぞれの枠を取り払い、地域の現有勢力を結集して総合的に医療の質を保つしかないでしょう。各医療機関が自らの特長を最大限に生かせるように、相互の連絡・連携を密にとり、必要時に電話一本で迅速に連動できるようにするしかないと思います。また隣接医療圏とも連携をとり、行政の力を借りるなどして患者の遠方への通院の便宜を図り、利用できる医療圏を積極的に広げていく必要があるとも考えます。

思い出すのは30年ほど前、私が道北の総合病院に勤務していた時のことです。当時は卒後5年目前後の若い医師が大半でしたが、みんな仲良くいつも夜遅くまで医局でワイワイやっていました。しかし救急外来に重症患者が来ると科の枠を超えて全員出動、個々の力は小さかったのですが、結構きっちりした救急医療をしていたように記憶しています。では現状で、各医療機関の密な連携・協力を確保するために具体的にどうするんだ?と言われれば私にも全く妙案はないのですが…。

さて余談になりますが、私も還暦を過ぎ、泌尿器科医になって30年以上経ちました。最近になり、今まで実感がなかったオシッコの悩みが現実のものとなり、患者さんの訴えを共有できるようになってきました。尿勢低下・夜間頻尿・尿意切迫等々、これでやっと一人前の泌尿器科医になれるのかなあ〜などと考える昨今です。